

## 土佐育英協会の「生い立ちシリーズ」③

〈砂土原寮〉から仮住まいの〈千束寮〉を経て、現在の〈井の頭寮〉へ

東京大空襲で砂土原寮が灰燼に帰し、動員解除された寮生たちは大学に復帰したものの生活に難儀していました。そこで(社)土佐協会では、寮生を収容する建物探しを始めました。そして昭和21年、仮住まいながら寮を確保することができました。

元郵政大臣で当時、大田区南千束で会社を経営していた高知県出身の寺尾豊氏の好意によって、その工員寮を無償で提供して頂けることになったのです。

これが千束寮で、収容人員は12名でした。

千束寮は、洗足池の近くにありました。この寮では、起床、消灯、食事、門限(11時)の合図に太鼓が鳴り、広い道場のような部屋と相まって、寮生たちは合宿所のような生活をおくっていました。当然、当時は食糧難の時代で、食べ盛りの寮生たちには、とても配給される食糧だけでは足りるはずもなく、裏の畑で野菜などをみんなで作って食事の足しにしていました。食事の世話は、砂土原寮の時と同様、寮生が寮母さんを雇い、賄ってもらっていました。

昭和22年、六三三四制の新学制が成立しました。新制の大学は、一部は昭和23年より、他は翌年より発足しましたので、これ以後、千束寮には旧制大学の学生と新制大学の学生が混在していました。

戦後6年が経過した頃、社会、経済とも何とか復興、安定してきたこともあって、(社)土佐協会としては、いつまでも寺尾豊氏のご厚意に甘えることはできないと考え始めていました。また、寮生の間でも“自分たちの寮”を持ちたいという気持ちが高まっていました。

そこで、昭和26年10月から“自分たちの土佐寮”を復興するための移転地探しと資金集めが協会理事の浜田幸雄氏を中心にして始まりました。

そして昭和27年になって、三鷹市牟礼(現 井の頭)に、元三浦観樹將軍の別荘で、後に明治生命の社員寮及び重役会その他会合に使用していた建物(A)とその敷地が安く売り出されているとの話が持ち込まれ、当時、日本勧業銀行の副総裁であった浜口巖根氏の斡旋などによって、明治生命から450万円で購入することが決まりました。

しかし、この450万円のうち、250万円は高知県や市町村の補助金と県内の一般有志の寄附金で賄うことが決まっていたのですが、残り200万円については東京を中心とした一般有志の寄附金に頼らざるを得ませんでした。

そこで、東京分の寄附金集めについては、寮生が中心となって集めることにしました。寮生たちは、浜口幸雄氏の紹介状と芳名録を持参して約2か月余り、春休み返上の募金活動を展開しました。その結果、ついに同年5月27日、お世話になった千束寮をあとにすることとなったのです。

井の頭寮は武蔵野の林の中にあり、すぐ近くには玉川上水が流れています。井の頭公園を縦断すれば吉祥寺駅もすぐで、非常に環境のよい場所に位置しています。

移転当時の収容人員は33名でした。

### (財)土佐育英協会 東京学生寮としての再出発

戦後、数々の民主化政策が実施され、教育の面でも憲法第26条に基づき、すべての国民に教育を受ける権利が保障され、また、教育基本法では教育の機会均等を図ることは国及び地方公共団体の責務とされました。

この県の責務を担う育英団体としては、東京に土佐寮の経営主体である(社)土佐協会、京都に土佐塾の経営主体である(財)高知協会、そして高知には(財)土佐奨学会があり、それぞれ独自に学生の就学援助を行っていましたが、どの団体も財政難という問題を抱えていました。

そこで、昭和32年度において、これらの育英法人を解散し、残余財産を統整理するとともに、高知県もこれに加わり、育英事業の拡充、振興、文化の向上に寄与するため、新たな育英団体を発足させることが協議され、昭和33年3月28日、(財)土佐育英協会が設立されました。

これにより、当面の財政難は解消されることとなり、土佐寮は(財)土佐育英協会東京学生寮として再出発することとなりました。

そして、(財)土佐育英協会設立時に(財)土佐奨学会から寄附された450万円を投じて、高知県のヤナセ杉を使った木造2階建ての寮舎(B)が寮舎(A)の東側に増築されました。これにより、収容定員は56名となりました。

昭和38年、元明治生命の社員寮であった木造2階建ての寮舎(A)が取り壊され、代わって昭和39年に近代的な鉄筋コンクリート3階建ての寮舎(現 北寮)が建築されました。これにより、収容定員は新館・旧館合せて100名となりました。

しかし、その後、高度経済成長のもと、家庭生活水準が上昇し、アパートなどの整備もあって、昭和49年1月9日付け読売新聞社説に“きらわれる学生寮”と掲載されたように、土佐寮においても、県下進学率上昇にもかかわらず、次第に入寮希望者が減少、改善策として、昭和50年に北寮舎が個室に改装されました。

平成3年3月、ヤナセ杉の木造2階建て寮舎(B)が取り壊され、代わって鉄筋コンクリート3階建ての寮舎(現 南寮)がもう1棟建築されました。これにより、収容定員は北寮・南寮合せて68名となり、現在に至っています。

この間、社会の変化に伴って寮生活や寮生気質は大きく変わり、意識の多様化の進展は顕著で、寮生による自治会運営は、個人志向の波に飲み込まれようとしています。

また、平成不況や少子化の影響が長引き、経営的にも大きな転換を求められようとしています。

次号へつづく